

玉如意
六

15
1386
7



門 45
號 1386
本 7



まう川中まらの巻

かゝる何の云

おのがまふかゝあめは未つひ花とよきなりは色はつらう人

はせむはら色ねおのとこもよみこまかゝる何の云といふと

いふおのこもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

何の云もよきなりそもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

よきと後りやうでまきるよふて其の藍といふもいふもいふも

名ねる成そハ韓^{カラ}よよりはへるな又韓^{カラ}藍といふもいふもいふも

といふ説の云い。但しかゝるといふもいふもいふもいふもいふも

の名ねる成そハ韓^{カラ}よよりはへるな又韓^{カラ}藍といふもいふもいふも



昭和九年
三月廿四日
小田村吉氏
長平友六
郎氏寄贈

一ががのそむまらうげあうの物うにんぼくもぞんじ
 て物をかゝるもれを志先まむとせぬこばああ
 のどちぶふもきかまほしけれもあまもるの
 きりひを見まじのこいひうねとてまよみそれ
 とんがうふあうのうぢきぬきぬきぬきかきうり^サ
 の文^{コブミ}あぢきりぐよみぐとていひゆるあぢきぬきぬき
 ぢよむ人をももみくかからぬあぢきぬきぬき
 ぢよぢひうよみえぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

一ががのそむまらうげあうの物うにんぼくもぞんじ
 て物をかゝるもれを志先まむとせぬこばああ
 のどちぶふもきかまほしけれもあまもるの
 きりひを見まじのこいひうねとてまよみそれ
 とんがうふあうのうぢきぬきぬきぬきかきうり^サ
 の文^{コブミ}あぢきりぐよみぐとていひゆるあぢきぬきぬき
 ぢよむ人をももみくかからぬあぢきぬきぬき
 ぢよぢひうよみえぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

とらみ〜〜とら〜〜とら〜

業お経信は月やわらうなとあまねく

月やあ〜ぬ喜やむ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜月やわらうなとあまねく
 身にしてげあふと〜お解〜れ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 く〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 い〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 お〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 ね〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 む〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 お〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 む〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜

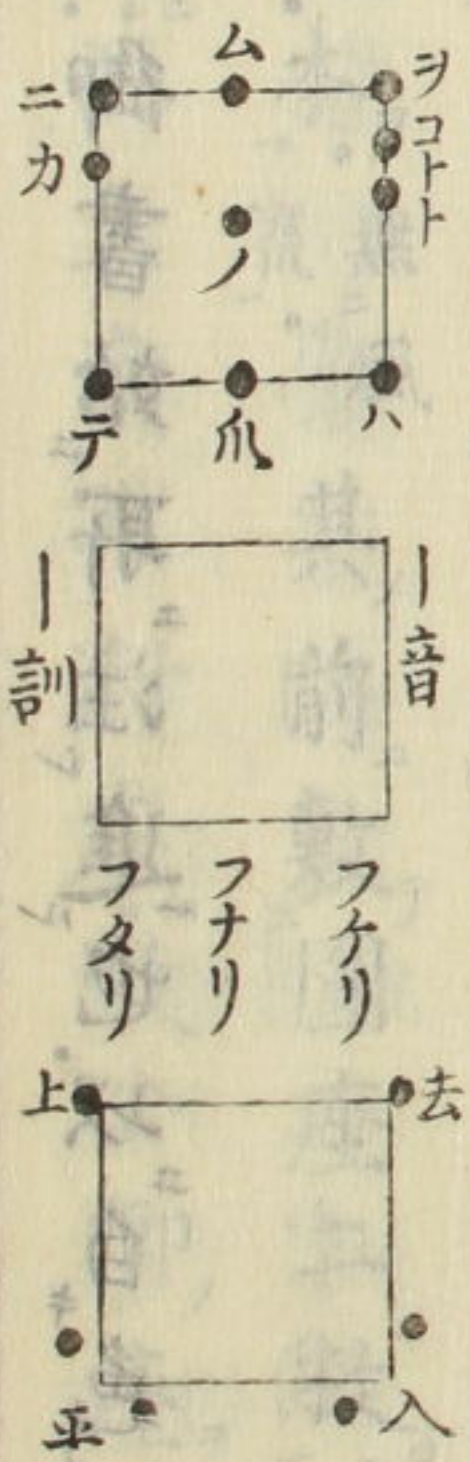
〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 さいお喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 おのや〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 おの語の〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 お照〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 おお〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 ね〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 ね〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜
 お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜お喜おぬ〜

何れも其の如きと云ふは此業の如きは其の如き
おしりていさおしよりしるおまや

菅原の紫系

菅原の紫系上下二巻のついでにその上の巻のいふがきこも
まげ下はまのいふがきこも上巻のいふがきこも
と菅原の紫系はのいふがきこも詩のまゐなん上の巻の
こよなくしていふがきこもいふがきこもいふがきこも
おとねいふがきこもいふがきこもいふがきこもいふがきこも
いふがきこもいふがきこもいふがきこもいふがきこも
いふがきこもいふがきこもいふがきこもいふがきこも

何れも其の如きと云ふは此業の如きは其の如き
おしりていさおしよりしるおまや
菅原の紫系上下二巻のついでにその上の巻のいふがきこも
まげ下はまのいふがきこも上巻のいふがきこも
と菅原の紫系はのいふがきこも詩のまゐなん上の巻の
こよなくしていふがきこもいふがきこもいふがきこも
おとねいふがきこもいふがきこもいふがきこもいふがきこも
いふがきこもいふがきこもいふがきこもいふがきこも
いふがきこもいふがきこもいふがきこもいふがきこも



件、三点圖正家朝臣御書始取注進也。以白色紙小
作子書付之。無表紙。

彦根寺以天德寺大轉五卷障

同記小。同三年十二月十五日。攝政殿令參詣近江
國彦根寺給云々。廿二日。太上皇令參御彦根給云
云。凡今年京中上下多以參詣此寺。予具申中納言
殿參詣也。觀音靈驗云々。

寛治三年女房入内衣此裝束

同記小。同五年十月廿五日庚辰。有三品篤子内親王
入内之是後三條院第四女母贈大后藤茂子。云

云。今夜女御御裝束。裏濃蘇芳御衣五。濃御罩。

同御袴。同打衣上着。梅花五重上着。黃菊

五重。小打着。赤色五重唐衣。白羅御裳也。

賀陽院亦合

同記云。同八年八月十九日。今夜大殿於賀陽院有
哥合興。是依永兼例。女房與男房為讀人。秉燭之間。
人々參集。東對南面。居公卿。饗饌殿上人。同東面。庇
饗。諸大夫。饗在侍所云々。雖然不被着寢殿。巽角東
面。戸前立切燈臺二本無風。其前敷圓座二枚。為左
右。講師座。東透渡殿。西上南北對座。敷公卿座。端對

座人々先令相分著給。左方北大殿殿下藤大納言。
□□民部卿俊明右衛門督公實藤中納言基忠江中納言匡房
皇太后宮權大夫公定右方南左大臣帥大納言經東
宮大夫師忠殿上人。大藏卿道良朝臣備中守政長朝
臣右大辨基綱朝臣頭中將國信朝臣右中辨宗忠
左馬頭師隆朝權中將顯實朝臣右馬頭兼實經四
位藤少將有家々左京權大夫俊賴々四位權少將
能俊々四位侍從宗信々尾張守忠教々藏人兵部
大輔通輔侍從家政藏人右少辨時範源少將有賢
民部大輔基兼新少將宗輔藏人玄蕃助宗佐左近將

豎仲兼相分候渡殿南北欄外次東戶前立左右文
臺ラ左銀透手巾篔ル白浮線綾巾打敷音地小文錦
右紫檀泔坏臺上居銀泔盃也。左右立筆一雙墨一
如唐人硯臺邊立和哥書五卷打敷赤地小文錦和
哥書物卷文各五卷春色紙下繪一卷瑠璃軸色
男繪皆書哥情欵歌人防女房中納言君筑前君周
美麗過差無極君攝津君右男房通俊卿匡房卿頭次召講師右
網朝臣正家朝臣賴綱々俊賴々次召講師右
基綱朝臣衣冠各々講之帥大納言為判者中宮大
右下官直衣夫執紙筆每度勝負先春夏秋冬祝次第如此夜及
參半歌講之間居菓子肴物大殿陪膳左少將有宗朝臣左府殿下地四

位。左府有宗。初獻無勸盃。第二獻皇太后宮。權大夫。次移居對南面。饗饌於此。座頻盃。及曉更事了。次召管絃。具有御遊帥。大納言。藤大納言。將笛。政長。朝臣。予宗。輔。皇太后宮。權大夫。安名尊。鳥破律。更衣太平樂。破三臺。急前池。諸船樂。樂人等令奏。次牽出物馬三疋。布衣或冠。次牽出物馬三疋。大臣帥人々退出。鳥羽殿。逐日看花歌。講。同記云。嘉保三年三月一日。午時許。參鳥羽殿。云。秉燭之後。有御遊。云。此間人。且進和歌。題者江申。時以後被出。常祗候。殿上人十餘人。只聞別召者。也。逐日看花。

皇太后宮。權大夫。與下官許也。于時庭櫻紛々。岸柳依々。歌笛之聲。誠入幽興。御遊後。召下官為講師。序者院。藏人。縫殿。助藤。実光。秀春日侍。鳥羽院。詠逐日看花。應製和歌一首。臣上。字皆共也。但他人。只詠和歌。許不書。臣上。字。中宮。大夫。為讀師。漸講和歌之處。中宮。大夫。歌。與頭。季。朝臣。歌。一字不誤。相合。又女房。歌。三首。書色之薄。樣講了。欲立座處。有勅被仰。云。近日。每日。有此和歌。興。御製。講師。不可用他人。汝同。可勤仕。則奉仰。又復。座披見。御製。講之處。已合。愚歌。天氣。令。嘆。御。滿座。之人。為奇。一者。面目也。以愚慮及高。

情一者恐畏也。以拙詞叶御製進退惟谷身心失度。已及深更事了人々退出與治部卿同車歸洛。下官フクカゼニチリクルハナモミルヒトノヒカズモトモニツモルハルカナ依テ叶御製被書留也。御製云ハサキシヨリチルマデミレバコノモトニ

内侍所御神樂

系束記云寛仁四年十二月廿八日甲辰今夜有内侍所御神樂云々召人十六人。地下殿上人近衛司者七人。此中長在内侍二人一人典侍博士十二人圍司六人女官十六人下四人賢所御前物十二盃。四干物四飯四已上物本自有御前居八足。机御酒召酒殿用之内侍陪膳博士取御盤云々御

幣十帖納柳折櫃奉。饗内侍二人前。合二種物。博士之先例四帖云々。十二人前圍司并女官等。各衝重一召人近衛司等。衝重各二可然人々。禄上人取之。禄典侍一領。掌侍合二種物。白單衣傳侍二人。命婦白單重一領。女官足下各一。白單衣傳侍二人。命婦白單重一領。女官足下各一。端以所召人各一領。近衛司給。此記も參議經頼マの記録。名の二字の偏をりて。系束とハ好づき。南殿の佛階乃橋橋。歷代編年集成云南殿櫻樹者本是梅樹也。桓武天皇遷都之時取被植也。而及兼和年中枯矣。仍仁明天皇被改植也。今度燒亡燒失畢造内裏之時取被

移^カ李部王^{重明}家櫻樹也。件樹本吉野山櫻云々。但
拾遺公忠朝臣哥詞延喜御時見南殿花云々。然者
天德以前櫻樹欵梅櫻事時可決之。橘樹者本自取
生託也。遷都以前此地橘大夫家之跡也云々。南殿
樹事番記録云。村上御宇天德三年十二月七日南
殿坤角新移栽橘樹一本^{高一丈}。件樹彈正尹親王
東三條家樹也。依勅定奉之。右近將監已下掘之。或
記云。遷都之時彼樹在取。稱橘大夫者家後園也。件
後園有橘。即南殿前以賞翫。其後回祿之後被栽。彼
東三條樹云々。小一條在大臣記云。橘本主秦保國

也。少^シ見^ル。今度燒亡とあるハ天德三年の燒亡のこと
大槐秘抄云。南殿の橘の本も此京ふいせと内裏もつと
いふりらるるに人乃家好ひきるが本出ていふとバきうれむ
あつしんひる殿上人も南殿のおりゆりて枝あがらむ
むねしひるがしりりともいふことおやひきし本も
一定のゆゑ本にあらしむがしり。ほつふ同書にいふ。今
の上を記す。封戸さうとむいふをなういふしうハおや
きうらういふべき近代の上を記おろしむを賜るもハ封戸の
なまがさうしりおろしむいふもさうしりちうり及ぬこと
あさう。又いふ近代もあつてこもれ酒のうへハ狂こい

おとまかたをきてしるしつてかありそめあがしそだをた
てちかしるし及びまゝしてしるしはあふちかしくらゝ
してあまぬしぎの難色一二人をかりぐてえ。

蘇我馬子が事

愚管抄云、崇峻天皇は馬子大にふるうこれあひて大にふさ
こしはとがをりおろねりまはよれたまをまゝ勢^チまてまてや
ふてハいふちあも言は人もちやまゝまゝていふべし今
も又あまぬしは日本あうハ南西王をあらうまわ
ちるまてハ大なるて又あまぬしと定めしむたなり
まふけ王と安康を皇とをわしその安康を七歳まむ

まごはまもは王子にあつたれはひよりハヤどはゆめは乃王
子もその時殺まふまはいせんら此崇峻のころま
終ふやうハうまゝもまゝもたうてははらうて
あべーやハ申おも聖徳太子おもくまをそりおて太子ハいふさ
てハはまももねくてやどする子も一つもまておろしはま
とよふんねくもあてしつて此もはあう葉まふもせんハ佛
法にて皇法をまりしんむるぞ佛法まてハ佛法をそり
るうん王法をえあまにまてしつてまてはあまのさん
まうと又物のまをくハ一定をまはあまにまてしつて
まはまてまてしつてあまをまてまて二つまてしつてはま

おて侍りしう。佛法お帰し。大長はまわしてける子。大長は
侍りしうと。うらひし。此大長はまわし。徳もあつ。まはだ。しむ
欽明の侍子といふむかりおて。位りつうせ侍りしう。武王の位大長
を殺すむと。ちさせめお時。子は大長。佛法を信し。う。力おて。か
る王を。ごころされぬまに。う。し。妙ひをうつ。に。く。侍りし
う。推古の位。ま。い。記りやま。ご。う。きん。と。ま。て。そ。相のお
ま。う。し。う。とい。う。りの。ま。ね。い。う。此。侍り。何。あ。が。ら。ふ。佛。法。を
い。み。し。き。お。う。し。お。て。む。と。し。て。中。く。ふ。ま。ま。この。ま。は。い。み。し。き。ま。が。ご
ま。なる。ま。ま。う。り。せ。う。かの。ま。て。何。ま。り。か。侍り。ま。ま。ま。い。し。ご。し。
一條天皇からまさせ侍りて。後。は。ま。お。ま。ま。る。宸。筆。の。物。の。し。

一條院くせさせ侍りし。後。侍。堂。殿。侍。ま。物。の。ま。ま。ま。ら。う。
侍。ま。第。乃。ま。ら。う。御。ま。ま。ま。後。乃。ま。ら。ふ。宸。筆。は。宣。令。を。う。た
あ。ま。か。せ。あ。う。侍。り。し。う。り。う。り。御。ま。ま。め。ふ。三。光。欲。明。覆。重。雲。大
精。暗。と。何。ま。ま。れ。う。り。う。ま。を。御。院。に。て。決。ま。る。ま。ま。よ。ぬ。せ。し。う。ぬ。り。て。
や。が。て。ま。ま。ま。こ。め。て。や。ま。何。ま。ら。ま。ふ。ら。ま。と。く。ま。ま。御。院。を。隆。國。に
大。地。ふ。ら。か。う。せ。侍りし。う。と。隆。國。に。記。し。て。侍りし。う。と。
延久の侍りし。お。始。ま。て。記。録。所。を。あ。う。れ。し。事。
延久の記録所を。ま。ま。め。て。あ。う。ま。う。り。う。り。ハ。諸。國。七。道。の。取。領
乃。宣。旨。官。公。符。を。た。う。し。公。田。ま。う。を。む。る。事。一。天。四。海。乃。巨。害
た。う。り。と。ま。ま。う。り。せ。し。し。め。て。し。ら。ま。ま。が。ま。ま。ま。ら。う。御。院。に。時。

一の所の領くゝとのしひく。そ是徳よりみらて。□□乃つ
と先もへがくゝねどいふをきくゝ也。りらゝりらふをさ
て宣旨下りて。徳人領知乃唐書文書をきされふ。
宇治殿へ作さるれりら。返るふら。別宣旨を下りて
て。此記録取へ文書どとめをこゝ。大相西の領をのぞくゝ
り宣下りて。中へはやく。を返さるなり。けはさ
き。いみゝきゝかゝと。よの申ふ。き。

安徳天皇の御事

此主上をバ。安徳天皇と。信を。かゝり。海より。か。せ。給ひ。ゆる
あや。い。げ。王。を。平。相。國。の。り。出。り。ま。わ。り。と。い。は。あ。藝。の。嚴。嶋。乃

明神の利生し。此いつくまゝ。つや。就。ま。は。む。と。め。し。と。た。つ
と。い。は。け。は。神。乃。ん。ど。い。ま。ふ。と。い。は。か。の。此。王。と。形。り
て。ま。れ。と。い。は。し。ま。を。ま。ふ。海。へ。う。ち。や。し。と。い。は。け。子。細。知
と。い。は。ち。や。き。る。け。り。は。ま。ま。と。い。は。し。と。い。は。也。この三件も。ぼ。ト
く。馬。笈。抄。に。は。書。七。巻。有。て。神。武。天。皇。より。順。徳。天。皇。の。は。ま。
兼。久。の。み。ま。と。は。前。々。の。事。を。記。し。て。そ。の。後。づ。か。論。あり。
け。し。は。う。き。と。い。は。し。て。ま。佛。の。例。の。佛。と。い。は。安。徳
の。事。は。は。る。な。ど。その。み。例。乃。佛。の。け。り。出。て。い。し。や。と。い。は。す。
と。う。づ。り。て。ま。ふ。と。い。は。し。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。
いつく。時。か。就。ま。は。む。と。い。は。す。と。い。は。す。の。女。り。海。ふ。ら。と。い。は。す。

とてつひて悩つきとぬかの邪。引つけハ本は入ふるな
るふりよりとそとんぬかきつうさかま。ことハ平治ハ保義朝の
首獄門よりかきつうさかま。波よき。ふりつとちし。志りつけハ
下野。うきつうさかま。兼友ハ本はうふねとハ。びうハ。飛人の首
さからハ。獄の門のりやね。つらね本はうけり。あふ
ら。此もは。いど書ふのせ。そと。そねは。は。つ。ふ。あ。ら。

後系極のそねへ

後系極、極改ハ。は。ひ。ハ。後。字。考。お。て。ご。と。し。む。を。い。ど。忌。後
抄。後。の。系。極。及。と。の。字。派。さ。へ。く。か。き。つ。り。

縣居大人の傳

つぐとわね大人と。答茂、縣主氏りて。孝祖ハ。神魂神の孫。鴨武
津之身命^{ツノミコ}おて。八咫鳥^{ヤタカラス}と化て。神武天を以導守にたり。は。ひ。ハ。神
た。と。と。姓。氏。孫。り。て。い。や。が。び。と。此。神。は。末。山。城。也。相。樂。郡
岡田、答茂、大神を以^{モテイフ}赫く。師朝といひ。一人。文永十一年ハ。遠
江。五。數。智。那。濱。松。を。岡。田。に。移。る。答。茂。の。新。名。を。い。つ。き。ま。つ。る。べき
よ。ハ。此。詔。を。蒙。り。て。彼。々。を。賜。り。て。そ。ね。ら。彼。新。宮。に。神。ま。り
た。と。と。け。り。馬。ま。ふ。り。又。繪。旨。に。ぬ。く。ね。り。相。あり。又。乾。元。元
年。ハ。詔。を。か。り。ゆ。り。て。う。け。是。の。地。を。領。ぎ。ら。れ。り。而。て。繪
旨。を。て。あ。ふ。傳。を。ね。り。か。く。て。そ。の。か。の。神。主。と。り。ハ。大人。乃
五世の祖。政定といひ。引る系の内軍ハ功有て。東照神御祖

君より奉玉行ぐらうと刀と花籠の具足とを賜りぬ此の
三行記の末に及らうとて大人も元禄十年ふば是迄の生
こ給ひしうとて一ほぞよとたふにゆくとせせて享
保十八年ふ京ののちりて稲荷に宿禰東麻呂大人の教
をうきあひ寛延三年ふ江戸ふ下り給ひて。其後田舎殿う仕
奉り給ひしうの殿より葵の文乃御衣を賜るをあつたのち
むてあやの山衣きと氏人乃のびりあのと種やきりきん
明和六年十月晦の日う七十までみまかり給ひぬ武蔵守在
原郡品川の東海寺に中少林院の山小築こも大人の赤子^{ヲシハコ}に
是某がとてうとてうとてうとてうとてうとてうとて

まことまらべまわのまふりれまふ又よきうとてうとて
うしきうとてうとてうとてうとて

花のうとて

花をけうとて花のうとて花のうとて花のうとて
て花のうとて花のうとて花のうとて花のうとて
それ花のうとて花のうとて花のうとて花のうとて
ばらうとて花のうとて花のうとて花のうとて
さうかた花のうとて花のうとて花のうとて花のうとて
やつ八重一重のうとて花のうとて花のうとて花のうとて
花日花のうとて花のうとて花のうとて花のうとて

系つたきハんのわろく小やちりく加るびおやう。されど
そとろく。むとやうなるむぐろ。海ふやちりむ。

神明鏡

神明鏡として。神武天皇より。後花園天皇の所代まで。此の
ごとを。上下二すれの物とあり。そとふ。神功皇后。戒
定慧箱を。摩白濱小埋み。松の枝を折。逆ふ其上。立ゆ。注。そを
依之箱崎と云し。皇后詔曰。第。湯の千代の松系石。思。且久津。礼
牟世まで。君ハ座ませ云。或も皇后を。安曇。磯童奉。思懸。り依
由。聞。召て。皇后。伊哥小云。衣ふ。二。し。ろく。バ。赤裸山。小。一。ち懸。ろく
ま。り。物を云。或云。箱崎。松。上。白幡。四流。赤幡。四流。降。下。長

八丈也。故号八幡。桓武天皇。此。伊時。又万葉集。伊撰と
ら。内舍人。濱成。兼。て。三千餘首。奉。撰。加。と。る。ふ。心。高。丘。親
王も。春宮。と。取。う。と。せ。終。て。弘法。の。弟。子。と。成。り。真。如。親。王。也
申。以。伊。哥。云。云。形。ろく。奈。落。の。底。り。落。ぬ。と。バ。利。利。し。戎。駄。も
か。ろく。ざ。り。ろく。大。師。嘆。終。了。返。哥。云。か。く。バ。り。達。磨。と。と。道
人。か。ま。バ。多。駄。迦。多。ま。で。も。成。の。が。り。ろく。兼。和。六。年。小。野。篁
隱。岐。國。へ。被。流。り。り。同。七。年。沙。汰。有。て。一。仰。三。仰。不。来。人。待
書。暗。雨。降。恋。乍。寢。と。云。遣。り。き。ろく。月。夜。り。ハ。来。ぬ。人。ま。り。ろく
う。以。曇。雨。ふ。小。ぬ。ろく。バ。び。つ。と。祢。毛。と。讀。ろく。ろく。れ。む。難。有。讀
ふ。り。ろく。伊。赦。免。り。り。大。く。と。か。ろく。や。ろく。ろく。ろく。と。ろく。と。と

をさうしふ書し。傍のけししはさうごもさうしふ。又二位
尼乃。安徳天皇。汝抱き。海り。あづきんとせし。孔も時乃
方。そのき。今ぞ。は。裳。濯。川の。流。ふ。信。の。底。ふ。も。み。や
こ。の。り。の。と。ハ。
笛の孔
悉曇藏云。元造曆云。伶倫造笛。文。此乃取嶰谷竹。學
鳳凰鳴者也。笛有十一孔也。二孔。闕而不傳。其九孔
者。以出五音。竹節為尾。竹抄為首。本管之口。呼之為
口。從此而起。於竹腹上。一。二。三。四。五。六。七。孔。如。行。呼
為。次。干。五。上。夕。中。六。下。口。六。二。孔。為。宮。此。有。二。條。謂

一越條。律。差陀條。呂。土也。口。六。二。孔。者。是。一。音。之。大
小。合。為。一。越。條。次。孔。非。別。條。也。名。為。无。條。是。則。諸。音。
塩。梅。故。也。干。孔。為。商。即。是。秋。音。此。有。三。條。謂。平。條。律
大。食。條。乞。食。條。呂。金也。五。孔。亦。非。別。條。塩。梅。之。義。同。
次。孔。故。也。上。孔。為。角。即。是。春。音。名。為。霜。條。律。其。呂。音
未。傳。之。木。也。夕。孔。為。徵。即。是。夏。音。也。此。有。二。條。謂。黃
鍾。條。律。垂。條。呂。火也。中。孔。為。羽。即。是。冬。音。名。為。盤。食。條。律。
其。呂。音。未。傳。之。水。也。中。孔。六。孔。以。此。二。孔。合。名。下
也。竹。節。下。孔。所。以。吹。之。者。也。抄
寶。伎。く。さ。い。お。く。鍵。あ。く。く

今云、中ふもかろづりて、密にうぎりをあつをえぐる
あり、ま中ふ鍵乃ろろハ何のぬふりと思へむじりて天智天皇
の御二年、近江国栗原郡小磐城村主殿とつひ一人の妻、家
の倉よりかとりて前へそとよると鑰匙二つよりあしむるを
とめてまろ殿よりろへる。そとよりその家富来えよりしる。
書記おろしり。ことよるや、家来でとらふかろて、後ふも
かくとろかろりふしむ。

持佛堂

天武天皇の御代、十三年三月廿七日は、みことのりふ、諸國每家
作佛舎、乃置佛像及經、以禮拜供養とあり、書紀より

とらり、民乃家くまで、持佛堂とつ物をかまて佛を
つるる。

天皇於伊前小直小訴をりせり事

春記云、長曆四年十月廿二日、今日初遷御内大臣、
二條第云、今夕行幸間、於東院東大路、與神解小
路、邊宇佐宮下部也。但月來訴人也。件愁人被取申文。一
人、着衣冠進寄御輿、右方音致訴訟之間、希有之
事也。為右將等不追却、不覺者等也。予令追却了、須
搦捕也。然而行幸新所之間、左右有憚也。故不令搦
也。事尤非常也。云々。同年十二月廿五日、平野

さてり海くの神社を廟とハナシまじきよりハ筑前國
 の香椎廟カミヒの古書ぞとふぞりて廟とハナシて。くら林名
 怪りいづればあるとなすべし。こまをふきてハ豊前國の大
 寺娘廟神社有り。なほあとのようハ古事記傳三十娘ヒメ志小
 いなり。考へるべし。さるゆゑよりさるもどろで神社を宗
 廟よ社稷よとナシハ皇國の古の決定めとふとく。むとあふかしく
 ぞふもさるみぢり。こまをいづる神社のさびさく。さるがくは
 くのとよりけさかしくおやふひあそびハあはしれ。さるか
 の社をあの佛はくさふ。引入むとあつと。日どとあ
 せえさるさるハふふとさるんぞや。

人を仁としや。近き世は俗サトヒゴトのやうなと。文粹の大江匡
 衡乃文。臣謬當其仁。聊記盛事。と云ふなり。

東京西京

平安城ハ東西の京をかりて。かごと。とよと。今ハあやぐ。
 東京の京をきて。西京と云えざり。ふや。慶保胤の池亭
 記ハ予二十年以來。歴見東西二京。西京人家漸稀。
 殆ナカレ幾幽墟矣。人者有去無来。屋者有壞無造。なり。
 じうけ女侍の位階
 延喜天曆がけり。あふなり。ハ。女侍とナシ。ハ。皇后ハはき

正仁の妃夫人あやのつゝふりて、つをきかりしふり
をせてハ、形位階とむきくぞ有きん小野宮、在太は此女の
女湯也。天曆元年、ふかろ進給りし。同十九日の教文小女御贈
從四位上藤原朝臣とぞんし。とれりし文粹小なり。
八木
系代八本といふ。ゆききし。小右記の、亮仁多壽の、
乃そは、八木十石八木石ねどるし。

客殿 小宮 其の御時、盛事し。とれりし。
吉部秘訓抄小。文治二正十同記云。大夫史廣房入
来。先立中門外。予出客殿とつり。客殿といふ。とれり。

つは、つりし。同日の書。建久四十一。五同記云。
今日仁和寺小宮高倉院御灌頂。後朝也云。おつり
了書とふ。いづれ元服をぬく。小君といふ。こふ小宮
とつり。ハ、皇子は、さふまは、と中は、さふべし。

平戸記。延應二年二月十一日。のらり。小臨。夜景。密
密参祇園。依恒例。之勤率。人数。有。百度詣。事云。ふの
まふ。掛カケ給。つり。おあり。こと。うは。弦より。あ。れ。と。う。又ハ
車。此牛。と。を。出。つり。同記。小殿下北。政所。令。参。春日。社。
給。予。依。召。引。献。懸。替。牛。一頭。と。つり。同記。仁治三年

の西小大和太政大臣... 明月記... 寛元三
年三月廿八日花供の佛事... 此間誦今度
新花讚此讚三度許念佛相交誦之其後誦新五偈
漢讚次誦其和讚是皆予制作之也... 同記同
年四月八日今日平野祭也依神事不念誦但依例
断塩... 八日ハ茶師の縁日塩...
今日修明門院強盜... 其日群盜推参

修明門院女房等皆悉遇其殃結句奉剝仙院云々
とつて... 北條泰時が政... 結句と
... 強盜のあり... 結句と
大名
白川頭廣王記の安元三年四月... 諸國大

名不_レ應_二國役_一と有り大名といふ名も有るもきし

台_レ後_レ大臣の名

右備大臣此名ハ真_レ吉備_レル_レて然_レ志_レ一_レ書_レ亦_レ有_レる_レを
續_レ紀_レあ_レふ_レ真_レ備_レと_レ有_レハ_レ有_レる_レの_レ由_レきて_レ吉_レ字_レを_レま_レぶ
きて_レ虫_レ始_レひ_レを_レ帰_レり_レ終_レひ_レ後_レも_レ終_レる_レの_レ由_レふ
相_レり_レハ_レ虫_レ始_レり_レ終_レる_レべ_レそ_レも_レそ_レう_レふ_レと_レ有_レる_レべ_レ
つ_レが_レ一_レ玉_レ人_レつ_レい_レあ_レつ_レむ_レ時_レも_レせ_レは_レも_レ終_レふ_レお_レや_レき_レる_レも
た_レて_レ終_レる_レべ_レそ_レう_レ有_レる_レふ_レは_レ也_レつ_レハ_レ韓_レ玉_レの_レ客_レり_レあ
ふ_レ時_レも_レ名_レを_レり_レど_レ成_レえ_レる_レも_レして_レか_レく_レ終_レる_レか_レき_レる_レ
し_レ終_レる_レか_レく_レ有_レる_レし_レ

國造

い_レふ_レ一_レり_レ國造_レとい_レひ_レハ_レ今_レの_レ世_レに_レ大_レま_レふ_レる_レつ_レが_レり
を_レ終_レる_レつ_レが_レり_レ大_レ名_レに_レあ_レつ_レ終_レる_レ相_レり_レて_レ終_レる_レお_レま_レく_レ有_レる_レし_レ
そ_レも_レ中_レ小_レ玉_レ造_レま_レ君_レま_レ別_レ又_レ直_レ又_レ稻_レ置_レま_レ縣_レ主_レま_レとい
ふ_レ色_レく_レは_レる_レそ_レも_レま_レ早_レき_レ家_レぢ_レ終_レる_レつ_レが_レり_レの_レ由_レきて_レ終_レる_レか_レき_レる_レ
か_レふ_レ記_レき_レ相_レり_レれ_レを_レい_レづ_レそ_レも_レく_レは_レる_レ早_レか_レり_レを_レ今_レも_レく_レく_レ
ま_レら_レれ_レま_レが_レも_レき_レも_レど_レ大_レう_レハ_レ皆_レ玉_レ造_レとい_レは_レる_レ終_レる_レ相_レり_レて_レ
管_レ一_レつ_レお_レま_レく_レも_レ玉_レ造_レとい_レり_レき_レ書_レ紀_レも_レふ_レ伴_レ造_レ國_レ
造_レ形_レど_レ有_レる_レハ_レは_レ色_レく_レを_レま_レく_レ一_レつ_レお_レま_レく_レとい_レは_レる_レし_レも_レて_レ
ろ_レう_レ終_レる_レも_レい_レう_レ一_レ封_レ建_レの_レ制_レと_レい_レひ_レ一_レ代_レの_レ諸_レ侯_レとい

延喜式式々々五十卷ありて。その先十卷を神祇式と
これを新延云の下なり。後ノ神公事のうち。五かが一つを
神事とせり。ことばにて。右神事カムワザのまつり。その言
ふも。盛サカらう。ほどを。おひそ。か。を。し。り。は。う。は。あ
どハ。神を。祭る。こと。い。ち。あ。う。そ。ふ。し。て。周の代より。こ。の。ま。い
よ。い。よ。あ。ら。う。り。ふ。あ。あ。る。と。然るを。此神の。侍。お。け。人。と。い
い。し。き。我。玉カラクニ。ゆ。り。ふ。あ。り。い。ち。う。ひ。て。よ。う。い。ち。う。を。や。

たう。い。と。ふ
子。集。集。り。あ。ら。う。と。い。言。は。う。と。あ。あ。い。ち。う。り。あ。ら。う
此。詞。を。さ。ま。し。い。説。み。あ。ら。う。い。今。そ。乃。あ。ら。う。と。い。は。あ。ら。う

考へ合らる。或は海川を。あ。ら。う。と。い。言。は。う。と。あ。あ。い。ち。う。り。あ。ら。う
い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う
あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う
よ。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う
べ。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う
い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う
い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う
あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う
の。長。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う
海。川。の。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う。い。ち。う。り。あ。ら。う

とつとつ川をほりゆくこと此かのみを海又川を
ふのよめれむ備あし結る此相中言の物候を
小いつまひつゝまふしを形造るむよみたり
樂はまふし神乃臣手にてつれつたがさハ
とつとも結むいふしかくやまはつりかきん
榮りいつとハいつとを結るかとなり

万葉集おてしとつ小義之ま大王と書候
系集之の巻小我定義之口之巻小言義之鬼尾七巻又
十二の巻小結義之十の巻小織義之十一の巻小
觸義之鬼尾こまは義之みあ曰辭おてしと訓を

まてと浄あしとてそとハ義字をての候ま用ひらふ
とつとつはまふ義とつとつまのまて義とのま
ま一つとつとつ義字ハま義を誤るにてりら
之といひ一人の名心此人書小名まきとた
くして皇國おても右よりこまが手跡をバ
みくあふし手師のまて書候し書のとつ
まて日本紀おも書博士をてのんせとて
まて又曰万葉集申おてしとつ小辭を
まておて知べしとて又七の巻十一の巻小結
定大王十一の巻小言大王物乎とつとつ
まて大王もてし

又月由を明といふも。さる月日のをて。夜の明るさるは。何れぞ。
夜の明るさる。月の影乃。ほふ何ぞや。ふらんや。相ふれ。何れぞや。
りて。明るさる。あり。あり。月といひ。書紀。欽明。此を
小。毘。毘。を。何れ。か。も。と。訓。る。と。鮮。あ。る。さ。る。こ。と。後。漢。書
小。天。竺。國。有。細。布。好。毘。毘。と。云。り。り。ち。て。有。り。た。り。十
四。の。光。り。さ。る。甲。は。光。り。ハ。珠。衣。乃。と。何。る。を。師。と。そ。と。さ。り。
何。れ。さ。る。と。訓。る。何。れ。さ。る。を。珠。の。こ。と。解。と。し。れ。と。何。
乃。光。り。ハ。い。ふ。ま。ぬ。と。て。裳。小。玉。裳。と。い。ふ。さ。る。い。ふ。さ。る。と。又
十。六。の。光。り。室。の。花。何。れ。い。つ。ハ。鮮。あ。る。と。衣。を。い。ふ。か。と。何。
何。れ。さ。る。い。ふ。さ。る。と。長。服。と。い。ふ。何。れ。さ。る。珍。て。や。む。と。

なごさる物をば。いふ。と。いふ。者。何。れ。さ。る。と。

美。姑。り。き。橋

美の橋。といふ。を。お。き。さ。る。と。い。ふ。中。ハ。美。姑。り。さ。る。の。こ。と。い。ふ。と。
い。ふ。橋。と。い。ふ。を。お。き。さ。る。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。
浮。橋。と。い。ふ。を。美。姑。り。の。光。り。を。お。き。さ。る。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。
潔。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。
和。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。
り。て。さ。る。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。
橋。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。
也。此。而。し。さ。る。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。

古と集大あ取のちふり山ふりしちかろ見えは笠ゆ
む乃崎こぎかろふかゆりさふゆここはる葉三のきゆ四極山打
越見者笠縫之嶋傍隠棚無小船とつるちかろ河笠ゆひとらう
むいぐめさるしさそふつ山笠ゆひのしぬち或人のいさくさそふ津
ふしふんつゆ今昔住吉らり東北方喜連といふさそゆへゆ道
のるさ山のむき坂ありきし雄畧紀ふ十四年正月呉ふ人の
系まきさそふ云泊於住吉津是月為呉客道通磯菌
津路名呉坂といふ今いふ喜連久礼を訛ると此さそふ住
吉郡北東のまそ河内乃堺りて北河内小治河郡かつきて伎
人郷といひし不し今も此さ西住吉北東の門たり東河内乃

柏原さそふありて北河内人のさそりしことかろる傳へ
る難波の右の園をえらふ住吉社乃南北方に細はとて沼はあり
てさそふさそふと記ししからし葉六のきゆ從千沼廻雨曾
零来四八津之泉即綱手綱乾有泊将堪香聞右一
首遊覽住吉濱還宮之時道上守部玉應詔作歌を
河ふり好たりさそ笠縫嶋今東生郡の深江村といふさそ
きゆへし此不菅田多く有てさそ夏地ふり務とさそ里入
むりさそ笠をゆふり業とてさそさそさそさそさそさそ
今と里長幸田存ちつといふ者北東なり伊即位のさそ河内
裏へ菅田献る又菅田の殿へも各座の料はさそさそさそさそ

延喜内匠寮式也。伊勢齋王野宮装束の中。御輿
中子管蓋一具。管并骨料材。從撰津。也。つり。笠縫氏也。
此系の人。をり。を。して。此深江村。大坂城より。来。り。たり。
て。河内。の。堺。の。近。し。此。地。の。い。へ。と。嶋。あり。し。り。里。人。の。い。ひ。傳。
へ。り。と。は。い。ふ。け。り。と。り。古。と。の。方。ハ。難。波。塚。に。り。つ。き。東。を。
大和川。南。あ。る。海。川。の。ち。り。小。川。を。多。く。流。也。つ。ひ。て。香。き。
沼。江。う。て。ま。し。と。お。ぢ。と。て。難。波。の。古。國。の。ま。か。も。然。ん。し。と。り。
又。今。け。里。人。の。傳。る。ゆ。き。と。此。村。の。も。地。を。く。て。は。ま。り。の。い。づ。ち。
と。い。つ。う。も。地。を。ま。り。井。の。ど。ほ。ま。葦。の。根。貝。の。か。り。ね。と。い。づ。と。
つ。ら。と。か。り。け。り。海。の。志。と。り。乃。坂。海。より。北。の。つ。り。て。よ。

き。あ。の。え。と。う。と。い。は。ば。冷。い。か。ら。も。ぬ。り。と。小。ね。と。い。よ。き。
ら。り。と。う。と。
萬。三。千。佛。哀。愍。二。十。八。萬。人。部。内。と。つ。り。と。い。ふ。その。い。は。
後。波。の。け。戸。口。の。大。と。り。救。り。べ。し。又。同。い。う。て。祭。城。山。神。文。と。
も。八。十。九。郷。二。十。萬。口。と。い。ふ。と。ふ。夏。流。文。州。の。裁。と。り。
大。後。の。い。は。り。乃。皮。を。ま。と。め。お。よ。び。と。い。つ。て。め。り。か。り。
と。て。ち。と。を。お。ぢ。せ。ぞ。か。り。あ。ら。せ。て。ゆ。り。と。い。は。り。と。い。ふ。め。り。

かゝる今の事ふいふなりかゝる下。

何れら

今事小き刀ふ何れらとつゝある。貞観儀式大嘗會用物
の中に阿為刀子柄といふあり此れより知るなり。

ほしとの笛をぬく。

台記より久安三年七月法皇天王寺御幸の事あり
いづく幸聖霊院云く勅群臣奏管絃勅曰苗資賢朝
臣笙内大臣筆策俊盛朝臣但称不堪不吹之琵琶
信西通憲 法名 笋覚羅 苗資賢朝臣其実法皇親吹但資
賢時吹法皇曰為沙門吹笛可招嘲即居隱障子

吹之予猶近候聞御笛音者上下莫不歎美御出家

後今夜初吹云くをんは此のゆきでとありしハ公ハ

ぬうぬいふせし信西覺羅琵琶等といは絃をひしむき

しむしむしハ女もさうなりき。

本おもむきしむる猿

赤床出つ来ふふよりぬき猿といはぬぞ思ひつる本をもむきしむ

しむと唱る。

さうしむしむきしむ

金葉集連ふたりしふふ和歌成ゆがなげたりまわりきふ
さうしむしむしむきしむて御をすきしむとてさうしむ

いこし妙

堀川屋の雪氷家好くあつたまにいつく妙を推しあきてうらや
の昔れまふまきてあつたまにいつく妙を推しあきてうらや

鶯さき波つら

さき妙を推しあきてうらや
おの鶯のさき妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや

峠

峠のさき妙を推しあきてうらや

いこし妙
さき妙を推しあきてうらや
おの鶯のさき妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや

くさ

くさ妙を推しあきてうらや
おの鶯のさき妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや
うらや妙を推しあきてうらや

ほつぐふいり。たぐもねきねとハ佛がもふ無始りのねとつ
ねふふきし。その無始と。きりり一始りいふもねを。始りまきとよ
まれぬハハハ。

いりその小柳兼昌。いりぬのよ向もこころ未だ本小思とくくうて
柳とくくうり。げ下句。非代、まふ神の難般境とつる地のよぬき
らぬいりくうつとハ。般をりし座をかあるまねべい。

台記。久安六年正月十二日。今日今麻呂參御前。
依勅書以呂波とくげはもふいりはをのくし今麻呂

も隆長つねるハ名なり。

神今食

神今食と。ぶんいんぶきと。字音ふの。唱へ来りて正しく
いふ唱ふべきふり。若くはとまむもたむ。ふりり人なり。書紀の
私記ふ古ハ神今木と謂いり見えりふりりて。ぶんぶん
けと唱ふと。上二字ハねかりしと。ふりりて。新ハ物ト
嘗祭らしハの神お同く。今ハ新のまねり。まねる新ハ物ト
いふ。今某とつと多り。古漢國より新ハ参事つふ
人ぞと。今某の漢人と云て。書紀り新漢と見え。大か。

つらつらり集まる人々今ありとよおし。さて今食といふハ。
世俗ヨソコトといふ稲モミを粟モミかてしむるふきく象ゾウを新アタタか磨スリて米コメか
くるを今食といふ。またかて。新磨イニズリか御食ミミケといふことおぼべ
し。古イニケトか今毛人イニケトといふ人、名か見えしをも今食といふことおぼべ
かよれる名おぼべし。かくて此神今食ハ。年毎乃六月と十二月
の十一日あり。月次祭の同日、夜か行つてしす。げその月次
祭ハ。三百四座の神カミいふ。幣帛ヒテガタをなり給ふ。そを月次と名よ
し。八月毎乃奉じ給ふ。なきを合せて二度おなり給ふ。かて。六
月あち。また七月より。十二月までのをなり。十二月あち。また
正月より。六月までをなりあふし。かくて。また同レ行つて行つて

神今食もそのほど給て。天皇は月毎か新磨イニズリか御食ミミケを
聞食キコシメもよりに。またなほ行むあべきを合せて二度より
行ひ給ふ。かて。そを新穀イニズリといふ。かて。新磨イニズリを聞
食キコシメ始むるをえふ。重オモシく嚴イミか齋イミ給ふ。先ツ神カミか奉じ給ひて。さ
て天皇はききし。ききし。かて。新嘗イニズリ大嘗イニズリはるる。かて
お同レ。ちか。あふ。此祭乃儀式も。何れも。かて。新嘗イニズリ大嘗イニズリの儀
の如く。おし。かて。この神今食は。かて。かて。かて。かて。かて。考へ
かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。考へ
か人ヒトも。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。考へ
か思オモひ。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。かて。考へ

さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さききば... 田舎... 寺は名... 物あふ...

さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...
さきふ... 田舎... 寺は名... 物あふ...

もろとくぞとけりぬべくねき。

もろとくぞとけりぬべくねき。

私取式部家系に人もたうくもとねく人呼ぶて此くをり
も君もとくよき。うらまびてもよふてぬ清きまバこのかをありぞ
うとくかりゆ。もたき星の編幅とつふくもひえ。そのまより
よりふてき。

俵とつふり

俵とつふ字。延喜式より見ゆ。延喜式に云ふ。美和十一年十一月二
日。太政官符ふとて。類聚三代格ふ載とあり。

朔日の礼

中原康富記ふ。嘉吉二年七月一日。参伏見殿。又参三
條殿。皆朔日之礼也。とあり。

祇園會於山拵

同記ふ。同三年六月七日。祇園祭礼也。神幸并拵山
己下。風流。如例。渡四條大路者也。

天の下の政神事抑さきとせしむる

職負令小神祇官ゆり。ゆり。ゆり。官のゆり。ゆり。あむて。そ
まがた。太政官と奉らむ。延喜式もゆり。ゆり。ゆり。小神祇
式。次。太政官式。ゆり。ゆり。北畠准后の職原抄も。令り
な。ゆり。ゆり。ゆり。ゆり。ゆり。ゆり。ゆり。ゆり。ゆり。ゆり。

萬葉集畧解 千藤大著 全三冊

年々隨筆 石原先生著 初帙三冊

江戸職人歌合 同右 全二冊

臣連二造考 同右 近刻

冠位通考 同右 嗣出

宰相通考 同右 近刻

尾張の家法 同右 近刻

志々木物語 六樹園夫著 全二冊

和名抄 大須本 全二冊

俳諧歳時記 著作堂先生著 全二冊

玉勝間四篇 本居大著 全三冊

同 五篇 同右 全三冊

義濃の家法 同右 全五冊

同 折添 同右 全三冊

地名字音轉用例 同右 全一冊

歷朝詔詞解 同右 全五冊

葛花 同右 全二冊

参考熱田大神縁起 全一冊

萬我孫子 市川先生著 全一冊

遷宮物語 菊谷先生著 全三冊

